

2022 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	有名人の自殺後にソーシャルメディア上に表れる心理プロセス—Twitter の投稿内容の分析—
キーワード	① 自殺、② ソーシャルメディア、③ 心理プロセス

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏名	タカハシ アスミ 高橋 あすみ
配付時の所属先・職位等 (令和4年4月1日現在)	北星学園大学 文学部・助教
現在の所属先・職位等 (令和5年7月1日現在)	北星学園大学 社会福祉学部心理学科・専任講師
プロフィール	北海道北見市生まれ。高校生の頃より自殺の問題に関心を持ち、大学1年生から仲間とともに自殺予防の啓発活動に取り組み始めました。心理学を学んで臨床心理士・公認心理師資格を取得し、2021年より北星学園大学に勤務しています。 現在は多くの研究者や支援者と協働し、主に大学における自殺対策や、有名人の自殺報道に関連するテーマに取り組んでいます。現代の社会問題と密接に絡む内容であり、時宜に適う知見の還元が重要であることから、啓発や教育など自殺の一次予防に関する実践も行っています。

1. 研究の概要

本研究は、2020年に自殺で亡くなったことが報道された俳優に焦点を当て、Twitter上に公開されている投稿内容から、人々の心理プロセスを検討することを目的とした。具体的には、俳優の死亡が報道された2020年7月18日から、1年後の2021年7月18日+3日後までの間に複数の観察時点・期間を設定し、スクレイピングソフトを用いて投稿内容を収集した。収集した投稿内容を整理し、言葉や文章の分析であるテキストマイニングを行った。

有名人の自殺後の人々の心理プロセスを検討する本研究は、影響を受けた個人に対するグリーフケアや、自殺の危険に傾く個人への自殺予防を考えるために重要である。国内では、自殺報道が自殺を増加させるウェルテル効果という現象に研究が集中しており、有名人の自殺報道後に引き起こされる心理に関しては先行研究が不足している。ソーシャルメディアの投稿を用いて分析することは海外では主流となっているため、本研究はそのような国際的な潮流に乗じている点が特色であった。

2. 研究の動機、目的

2020年の日本の年間自殺者数は21,081人であり、それまでの漸減傾向に反して増加した(警察庁, 2021)。この増加の一因として、2020年に相次いだ有名人の自殺報道が挙げられている(いのち支える自殺対策推進センター, 2020)。自殺の報道後に人々の自殺が増加する現象である「ウェルテル効果」(Phillips, 1974)は、多くの先行研究で確認されており、有名人の自殺の場合にその影響力は約5倍であることが示唆されている(Stack, 2005)。しかし、有名人の自殺報道後に個人が経験する心理プロセスについては、明らかになっていない部分

が多い。

国際的には近年、ソーシャルメディア上の投稿から有名人の死後に人々の受ける影響や悲嘆反応を分析する研究がなされている（高橋・大井，2022）。日本においては、自殺報道後のTwitter上の反応の大きさや情報検索量は、自殺の増加と関連することが示唆されている（Ueda et al., 2017; 太刀川・池田，2021）。しかしながら、これらの先行研究は短期間の投稿に対する計量分析であり、ソーシャルメディアの具体的な投稿内容から心理プロセスを明らかにしようとする研究は未だなされていない。Courtbet & Courtbet (2014)によれば、有名人の死後のソーシャルメディアは、ファンの悲嘆表明や死へのより良い対処、ファン同士のサポートなどにつながる、といった肯定的な機能を有している。そのため、有名人の自殺後に、ソーシャルメディア上になされた投稿を一定期間追って検討することにより、人々が有名人の自殺を受けて経験する悲嘆とその変化や、その中でのソーシャルメディアの役割を明らかにすることにもつながる。

3. 研究の結果

自殺報道後から1年+3日後までに設定した複数の観察時点・期間（標本日）に含まれる合計16日間分の投稿を収集し、重複を除外した33万6,794件の投稿が分析対象となった。

各標本日に収集できた投稿数から、ユーザーが何に反応して投稿したのかを推測した。最も収集数が多かったのは報道のあった当日（2020/7/18）で、12万3,753件であった。次に収集数が多かった7/24は、4万9,286件の投稿のうち、故人のミュージックビデオの放映に関する投稿が目立った。次に女優の自殺報道のあった9/27に2万4,328件の投稿が収集された。これは、故人と女優の関係性への言及や、有名人の自殺報道が続いたことが関連すると考えられた。次に投稿が多かったのは、1年後の命日である2021/7/18で1万6,485件であった。

多次元尺度構成法と呼ばれる方法で、投稿に頻出する語句の類似度を視覚的に示した図を全標本日で表した。本レポートでは報道当日と1年後を抜粋して図1、2に示した。報道当日は、俳優の名前とともに「冥福」「お祈り」「訃報」「悲しい」「辛い」「自殺」など、自殺報道や訃報を受けた悲しみを表す言葉が中心に付置された。また、故人の活動に関連する言葉（「映画」「演技」「テレビ」など）と関連して「笑顔」「大好き」「素敵」など、ユーザーから故人への想いを表現する言葉が近くに付置された。「え」「嘘」「びっくり」「ショック」「若い」など驚きを表す言葉も見られた。自殺に関連する言葉として「死ぬ」「死」「分かる」が近くに付置されているが、これは自殺した故人の背景に対する「分かる／分からなさ」や、自分自身の気持ちの「分かる／分からなさ」などを反映する投稿が含まれていた。1か月後の投稿では「好き」「嬉しい」「ありがとう」「幸せ」「優しい」など、ファンが作品や思い出を通して故人に対するポジティブな感情を投稿していることもうかがえた。

1年後の投稿では、故人の名前の近くに「大好き」「笑顔」「涙」「ありがとう」など、故人に向けたと思われる言葉が多くみられた。また、「空」「見上げる」「想い」「届く」「永遠」など、空を見上げて故人を感じることや、故人への想いは永遠であるといった、ファンと故人の継続される絆を表す投稿がみられた。一方で、故人への「悲しい」「泣く」「辛い」といった死別後のグリーフを表す投稿は、1か月後、半年後、1年たった時点でも依然として残されていた。

これらの結果から、当初は自殺への驚きや、追悼、死別後のグリーフを表現する投稿が多くみられていたが、Twitter上では故人との絆を表現する投稿も多くみられ、1年後には死因に注目した投稿よりも、故人のグリーフや、故人との継続する絆に関する投稿が多いことが明らかとなった。

4. 研究者としてのこれからの展望

筆者は、研究者として日本の自殺対策、ひいては国際的な自殺予防にも貢献していくことを目標に、今後もこの研究テーマを進めていきたいと思っています。本奨励金をいただいた後に研究のアイデアを発展させることができ、本年度から科学研究費を得て関連研究を進められることとなりました。自殺や死を扱う心理学研究を実施する過程では、研究目的を果たそうとするだけの視点では不十分であり、研究に協力してくださる方々や関係者の心情に重きを置くことが最重要といっても過言ではありません。研究者として、本分野での倫理的な研究デザイン・研究方法の確立にも貢献していきたいと考えています。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

改めまして、本研究に助成をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。本研究テーマは、国内の先行研究も少なく、研究資金のための助成金もなかなか採択とならなかったところで、この度の女性研究者奨励金という形で評価いただけたことが、研究を行う何よりの励みとなりました。Twitterの投稿内容の収集や投稿内容の整理という点で時間がかかりましたが、助成金を基に論文投稿の準備を進めることができています。本研究で得られた知見はまず、故人と継続する絆を持つファンの方々へ向けた心理的支援につながれると考えています。また、残念なことに有名人の自殺報道を完全になくすことは難しく、今後も報道後の心理的ケアが重要になってくると思われます。筆者は研究テーマを継続し、得られた知見は時宜を得て自殺報道と向き合う社会、メディア、視聴者の方々に向けたメッセージとして発信していきたいと思っています。そして、人々のグリーフケアや自殺予防に貢献できるように、今後も研究に邁進してまいります。